

氏名 田中 草大

本論文は平安時代に書かれた変体漢文を主として語彙と表記の観点から考察したものである。全体は6部22章から構成されている。

序論では変体漢文を漢字のみで書かれながら日本語文を表記したものであると定義して、その体裁等について論じ(第1章)、また研究史を概観する(第2章・付章)。

第1部では、変体漢文の語彙からオドロク(驚)、アソブ(遊)、ヒサシ(久)、ワヅカナリ(僅・纒)、サカリナリ(盛)、オク(置)の6語を取り上げて詳細に検討し、これらの意味用法は、漢文訓読文のそれとは異なり、和文の意味用法と共通しており、それは変体漢文の基盤が貴族の日常語にあるからであるとする(第1章～第8章)。

第2部では、漢文訓読文と変体漢文には用いられ、しかし、原則的に和文に使用されない語であるスミヤカナリ(速)とタヤスシ(輒)を取り上げ、これらの用法には相違が多く、変体漢文が漢文訓読文と近いことを示すのではないことを述べる(第1章～第3章)。また変体漢文に頻出する「等」や「欲」の訓法についても論ずる(第4章～第5章)。

第3部では、変体漢文における「矣」「焉」が本来不要でありながら用いられるのは、段落の末尾を示すことがあるからだとし(第1章～第2章)、また変体漢文文書に引用された際に仮名文書が漢字のみの文章に変換される現象について取り上げ、変換された文章の性格を論ずる(第3章)。

付論では、著名な変体漢文資料の1つであり、従来988年のものとされる「尾張国解文」を取り上げ、語彙・表記の特徴から、今の形態になったのは12世紀以後であると主張する。

結論(第1・2章)では、前の部分までの内容をまとめた上で、中世の変体漢文に関する日本語学的研究のさらなる深化など、今後の課題と展望を述べる。

本論文は、従来の研究が平安時代の変体漢文の言語的な性格について、正格漢文を日本語として訓読した漢文訓読語と近いとして来たことを批判した上で、変体漢文の日本語はむしろ和文のそれに近い面があり、それは変体漢文の日本語が当時の男性貴族の言語を基盤としていることによるという見方を提示している。この分析の際に漢文訓読文、和文、変体漢文のいずれにも用いられていながら意味用法の異なる語彙(「文体間共通語」)を用いていることはよく成功しており、漢字のみで書かれた変体漢文をどのように解説(日本語に還元)するかという点にはなお課題を残す面はあるものの、本論文は変体漢文の日本語学的研究を大きく進めたものとして高く評価できる。この理由から、本審査委員会は全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。